

タイトル：摂食障害治療における新たなパースペクティブ：患者を囲む人間関係の統合／分断度の提案

演者：藤井康子 1)2)、富士見ユキオ 3)、石川俊男 1)

- 1) 国立研究開発法人国立国際医療研究センター国府台病院心療内科
- 2) 赤坂こころのクリニック「ケイローン」精神科・心療内科
- 3) 富士見ユキオ心理面接室

【はじめに】石川（2015）は摂食障害の治療の成否を左右するのは一次的には「良好な治療関係」または「治療同盟」であり、「治療法が何であるか」は「それによって良好な治療関係の構築ができればよい」ので二次的な意味しかない、という見解を述べた。富士見と岸原は、家族療法や夫婦療法において重要なのは、成員の共有可能な目標やアイデンティティーを治療者が見つけて“we”を形成することであり、共有点は何であるかは重要ではないと述べた。私はこの二つの主張に共通点を見出し、仮説を立てた。即ち、「摂食障害の治療においてそのケースでそれ以上分割不可能な最小単位と考えられる集団内に良好な同盟関係（we）を形成することが治療の成功につながる」という仮説である。最小単位はケースによって患者と治療者のみで形成される場合もあれば、患者家族や、他の病院スタッフ、地域の福祉関連のスタッフなどを含む場合もあるだろう。このように考えてくると、摂食障害の治療において、この集団（we）の統合／分断度は、治療を大きく左右する要素である可能性があるにも関わらず、これを測定する指標がないことに気づく。先程の仮説を検証するには、何らかの方法でこれを測定し、患者の病状との関連を調べる必要があるだろう。

【目的・方法】本発表では、約8年間の演者らによる治療を経て寛解した最重度の神経性無食欲症（過食・排出型）の事例の経過を通して、患者を取り巻く集団内の統合度と患者の病状との関連を検証した。

【結果】本事例では、患者を取り巻く集団内の統合度と患者の病状は密接に関連していると考えられた。【考察】本症例における集団の統合度と病状の関連の特徴、また集団内の統合度を高めるのに時間のかかった要因について考察した。【結論】経過中異なる時期に異なる治療法が用いられたが、全体を通して最終的に集団内の統合度が高まったことが寛解につながったのではないかと推測された。